

第57回歴史地理学会大会報告

本年度の大会は、5月16日・17日・18日・19日の4日間、長崎外国語大学、長崎歴史文化博物館において開催された。

16日は公開講演が行われ、17日は自由論題の発表が行われ、引き続き総会と懇親会が催された。18日は自由論題の発表とシンポジウム「旅・観光・歴史遺産」が行われた。19日は「西彼杵半島・大村湾周辺の歴史遺産探訪」と題して巡検が行われた。

大会運営の労を惜しまれなかった大会実行委員の各位ならびに座長を務められた会員に深く謝意を表す。

開催期日：平成26年5月16日(金)・17日(土)・18日(日)・19日(月)

会場：長崎外国語大学(長崎市横尾3-15-1)

長崎歴史文化博物館(長崎市立山1-1-1)

実行委員：木本雅康(委員長 長崎外国語大)、五十嵐 勉(佐賀大)、大平晃久(長崎大)、

小島大輔(長崎国際大)、深見 聡(長崎大)、安江枝里子(長崎外国語大)

大会スケジュール

5月16日(金)	18:30~20:40	公開講演会(長崎歴史文化博物館)
17日(土)	12:00~13:00	評議員会(長崎外国語大学)
	13:30~16:30	研究発表〔自由論題〕(同上)
	16:50~17:50	総会(同上)
	18:00~20:00	懇親会(同上)
18日(日)	9:30~15:30	シンポジウム「旅・観光・歴史遺産」・研究発表〔自由論題〕(同上)
19日(月)	8:00~17:00	巡検「西彼杵半島・大村湾周辺の歴史遺産探訪」 (西彼杵半島・大村湾周辺)

公開講演・研究発表プログラム

5月16日(金) 公開講演

五十嵐 勉(佐賀大)：棚田の文化的景観

平岡昭利(下関市立大)：アホウドリと日本人の太平洋進出

5月17日(土) 研究発表〔自由論題〕

第1会場 自由論題

101 (13:30) 三好孝治(広島工業大)：モバイルと絵図・古地図を活用した歴史町歩き
—屋号から推測する町の様子—

102 (14:00) 神 英雄(世界こども美術館)：「万葉集」羈旅歌群と西海道—1233歌を中心に—

103 (14:30) 坂井伸子(長崎大・院)：歴史的地理的指標としての歌枕の在り方
—十六夜日記を中心に—

104 (15:00) 古田悦造(東京学芸大)：『江戸名所図会』と『東都歳時記』における宝井其角の俳諧
—歴史地理学的視角からの考察—

105 (15:30) 阿部美香(同志社大・非)：19世紀日本と英国における「文化的景観」および風景評価の
着目点に関する比較—近世日本の名所案内記と同時代英国の
旅行文学をもとにして—

- 106 (16:00) 阪野祐介 (韓国海洋大学校) : 長崎西坂におけるカトリック巡礼地の成立とその背景
—日本二十六聖人殉教地を事例に—

第2会場 自由論題 *登壇者

- 201 (13:30) 湯澤規子 (筑波大) : 共同炊事と集団食からみた尾西織物業地域と周辺農村の近代
—一起共同炊事組合・鈴鎌工場寄宿舎の史料に着目して—
- 202 (14:00) 井村博宣 (日本大) : わが国におけるアユ養殖業の発達史
- 203 (14:30) 堀 健彦 (新潟大) : 近世後期における過去認識と災害情報の社会的受容
- 204 (15:00) 中野不二男* (宇宙航空研究開発機構)・山敷備亮 (京都大)・田殿武雄 (宇宙航空研究開
発機構)・根本 茂 (株・ブロードバンドタワー)
: 衛星データと古図等の融合による出島の建設に関する研究
- 205 (15:30) 花木宏直 (琉球大) : 明治中期の鹿児島県における海外移民送出地域の拡大
—沖縄県との関わりに注目して—
- 206 (16:00) 矢ヶ崎典隆 (日本大) : アメリカ合衆国におけるロシア系ドイツ人の移住とエスニック文
化の再生

5月18日(日) 研究発表 [シンポジウム・自由論題]

第1会場 シンポジウム【旅・観光・歴史遺産】

オーガナイザー: 岩鼻通明 (山形大)・原淳一郎 (米沢女子短大)

趣旨説明 (9:30) : 岩鼻通明

第1セッション—旅— (9:35-10:45)

S101 浅川泰宏 (埼玉県立大) : 巡礼が刻む道と時: 1980年代以降の研究史と展望

S102 西海賢二 (東京家政学院大) : 霊山登拝の旅日記

コメント: 原淳一郎

第2セッション—観光— (10:50-12:00)

S103 平山 昇 (九州産業大) : 寺社参詣と鉄道

S104 荒山正彦 (関西学院大) : 近代メディアと外地/植民地ツーリズムの空間

コメント: 内田忠賢 (奈良女子大)

第3セッション—歴史遺産— (13:00-14:40)

S105 山元貴継 (中部大) : 韓国における世界文化遺産登録—歴史的地域の取り扱いをめぐる—

S106 鷺崎俊太郎 (九州大)・島津忠裕 (島津興業) : 世界文化遺産登録と観光まちづくり (鹿児島)

S107 松井圭介 (筑波大) : 長崎の教会群と宗教ツーリズム

コメント: 鈴木地平 (文化庁)

総合討論 (14:50-15:20)

総括・あいさつ (15:20-15:30) : 岩鼻通明・原淳一郎

第2会場 研究発表 自由論題

- 207 (9:30) 國府久郎 (長崎外国語大) : 都心と郊外農村を結ぶ路面電車ネットワーク
—20世紀初頭マルセイユの事例を中心に—
- 208 (10:00) 柴田陽一 (京都大・研) : マイナー軍港都市の近現代—要港部が置かれた都市—
- 209 (10:30) 鈴木垂香音 (佛教大・院) : 明治期京都における旧市街の変容
—市街空地を手がかりとして—
- 210 (11:00) 石井智子 (茨城大・院) : 正保常陸国絵図の編集図
—原本調査に基づく表現内容の検討—

101 モバイルと絵図・古地図を活用した歴史町歩き—屋号から推測する町の様子—

三好孝治（広島工業大）

本発表では、PDAやiPadなどのモバイル機器を使った町歩きの一手法を提案する。対象地域は広島県廿日市市天神周辺、廿日市市宮島町家通り、広島市内西国街道沿いである。モバイル画面に古地図や絵図を表示し、GPS機能により絵図中を歩く方法はすでにおこなわれているが、本システムの特徴は屋号から家業を明らかにし、当時の町の様子を推測することである。

江戸時代の廿日市宿は、正徳年間町屋絵図(1711～15)の屋号情報から町を把握した。町屋の家業を知り、分布図を作成し、材木屋、桶屋、鍛冶屋が集中する地域など町の特徴をつかんだ。1914(大正3)年の「佐伯郡廿日市町軍用旅舎明細地図」には、主な公的機関の名前や家主の姓が記載されており、当時を知る地元の方への聞き取り調査により高い情報を得た。岩田は人力車屋、前田はうどん屋などであり、港や郡役所周辺の活気ある町の様子を把握できた。宮島の吉田家文書(1783)に記された屋号を調査した結果、町屋通りの「たうふや」、「阿賀屋」(魚問屋)、「和泉屋」(女郎屋)、「因幡屋」(米屋)、などの家業がわかった。遊郭、湊周辺に集中する米問屋、魚棚町の魚問屋など、町屋通りの商家の様子が明らかとなった。江戸時代の広島の資料としては、広島城下絵屏風(1804～1807)がある。その他、広島城下切絵図や広島諸商仕入れ買物案内記(1883)などの屋号情報を活かし、江戸から明治にかけての広島の町の様子を明らかにする予定である。

廿日市の町歩きでは、江戸・大正の人々の暮らしに焦点をあて、本陣がおかれ繁栄した宿場町の町人や、郡役所がおかれ港周辺が賑わった頃の住民の生活を感じることができた。宮島町屋通りでは、「厳島図絵」(1842)、「とみくじ界晩終地図—慶応記憶地図」(1866)を、地図情報として利用し、当時新町にあった遊郭の様子や、湊周辺の地形や町の変化が実感できる町歩きを実施した。広島市内の町歩きは、広島城下絵屏風の中の西国街道を歩くことを目的としており、絵屏風に描かれた当時の風俗・風習に関する豊富な情報を活かした内容にしたい。また、広島諸商仕入れ買物案内記は、明治の商家や軒並みが細かく描かれた銅版画

であるので、建築史、意匠の観点からも興味がわく町歩きが期待できる。

屋号情報を活かした町歩きの魅力は、当時の人々の暮らしを知った上で、各町の特徴(廿日市=宿場町、宮島=門前町、広島=城下町)が把握できること、屋号の調査研究から得られた情報を絵図や古地図などの地図情報に付け加えることにより、当時の商家の町並みや高い様子をより具体的にイメージできることである。

102 「万葉集」羈旅歌群と西海道—1233歌を中心に—

神 英雄（世界こども美術館）

I 研究の目的と方法

『万葉集』の景観論的考察を進めてきた発表者は、万葉歌の世界を正しく理解するためには、当時の景観を出来るだけ正確に把握した上で、作品の文学性に迫ることが大切だと考え、これまで山陰道の万葉歌について考察してきた(『柿本人麻呂の石見』ほか)。今回の発表では、『万葉集』巻7に収められた

未通^{おとめ}女らが織る機の上を真櫛^{たく}もちかかげ栲島波に見ゆ (巻7-1233)

に見える「栲島」の所在地について報告したい。

II 従来^{おとめ}の考察と問題点

「栲島」については古くから複数の説があったが、中でも島根県松江市八束町の大根島を充てる説が有力であった。しかし、これは現地調査や十分な史料検討のないままに特定されていて、科学的根拠の乏しいものである。ほかに福岡県の玄海島や長崎県の度島を充てる説もあったが、大根島同様に十分な調査や史料分析が行われたものではなかったように思われる。

III 羈^{きりよ}旅歌群の並び方

『万葉集』巻7の1161～1250の90首は旅の歌を詠んだ「羈旅歌群」である。この90首は、冒頭歌に続いて、①東海道の歌、②東山道の歌、③北陸道の歌、④山陽道の歌、⑤南海道の歌と『延喜式』の記載順と同じように並ぶ(山陰道の歌はなし)。ところが、その後は突然⑥海辺の歌、⑦陸路の歌となる。

しかし、⑥・⑦の歌に見える歌枕(歌に詠まれた名所)は、江戸時代以来の研究者の「限られた知覚空間」の中で現地比定されたものだったと言

えないだろうか。

IV 栲島の所在地

改めて歌枕を検討すると、西海道の諸国の歌枕が続くことが判る。このことから、「羈旅歌群」の⑥は西海道の海路の歌、⑦は西海道の陸路の歌を集めたものと考えられる。

「栲島」を詠んだ巻7-1233の前の歌は、筑前から肥前の海岸部に見える歌枕（地名）が続く。このことから、1233の歌は西海道の海路を詠んだものの一つであり、「栲島」は長崎県平戸市沖にある度島であると理解すべきものである。

103 歴史的地理的指標としての歌枕の在り方

—十六夜日記を中心に—

坂井伸子（長崎大・院）

『十六夜日記』は、わが子の領地をめぐる裁判のため、阿仏尼という女性が京から鎌倉へと旅をする紀行文である。紀行文らしく、日付や風景・宿泊地など、地理的記録的な要素の面と、たくさんの和歌が詠まれ、情緒豊かな文学的文章の面としての両面を持つ。

文学的・地理的・歴史的背景をもって和歌に詠まれる特定の地名を「歌枕」という。『日本古典文学大辞典』によると「ある地名が（中略）多数の歌人に読み継がれていくうちに、固有の情緒が付着する。（中略）その情緒が付着した地名が歌枕である。（中略）読者は、特定の歌枕に接すると、いながらにして歴史的に形成された豊かな情緒を感じることができる。」とある。『十六夜日記』の中には、多くの地名が見出されるが、その多くが歌枕であることの意味を、地理的・歴史的視点から考えてみたい。

まず、『十六夜日記』に見られるすべての地名と、それに該当する地名が歌論書に載っているかどうかを調べ、表にした。その表から以下のことがわかった。

- ①京から鎌倉までの主要な歌枕は、『十六夜日記』では、必ず登場している。
- ②『十六夜日記』にのみ登場する地名は11カ所あるが、歌論書には出てこないの、歌枕と言えない地名である。
- ③11カ所の地名のうち、6カ所で歌を詠んでいる。阿仏尼は歌道に関わりが深いことから、言葉遊び的に和歌に用いることができる地名で

は、歌を詠んでいると考えられる。

- ④地理的存在としての歌枕の場合、街道筋からわざわざルートを外れて立ち寄ることもあるので、海道筋からの距離の長短を考察することでその場所の歌枕としての重要性・価値の重さが推測できるのではないかと。

- ⑤阿仏尼は、歴史的空間でもある歌枕を重要視し、その情緒の再現に努めていたことが窺われる。

次に、同時代の他の紀行文との比較を行った。他の作品に出てくる頻度の高い地名、上位18カ所のうち、『十六夜日記』は、17カ所について記述している。阿仏尼は、歌枕として著名な名所に、並々ならぬ関心を持っていたことがわかる。また、『十六夜日記』より2～3百年前に書かれた『更級日記』や『能因歌枕』に出てくる地名とも一致の割合が高く、阿仏尼が先行の文献もよく読み込んでいたことがわかる。

最後に、歌枕という観点から『十六夜日記』を見ると、阿仏尼が自分独自の新たな観点で描写するというよりも、長い歴史的地理的背景を経て形成された「歌枕」の情緒を重視し、尊重して、その歴史性・地理性を追体験するという意味合いが、『十六夜日記』創作の基本的立場としてあったのではないかと考える。

104 『江戸名所図会』と『東都歳時記』における宝井其角の俳諧—歴史地理学的視角からの考察—

古田悦造（東京学芸大）

安永9（1780）年に京都において『都名所図会』が刊行された。この後、江戸においても『江戸名所図会』（天保5（1834）年、天保7（1836）年）や『東都歳時記』（天保9（1838）年）が出版され、多くの庶民に読まれた。これらの名所絵図類には、多くの挿絵とともに詩歌が添えられており、なかでも室井其角の俳諧が最も多く、『江戸名所図会』で27点、『東都歳時記』で9点がみられる。

本研究では、挿絵および本文にみられる宝井其角の俳諧について、『江戸名所図会』と『東都歳時記』とを比較することによって、当該の俳諧の選定理由に関して検討する。

『江戸名所図会』における宝井其角の俳諧は、挿絵では27点が、本文中には5点（挿絵との重複

の3点を含む)がみられる。また、『東都歳時記』においては挿絵で9点が、本文中には28点(挿絵との重複の2点を含む)がみられる。両書の挿絵および本文中の俳諧を比較すれば、双方の挿絵に示された共通の俳諧は、「里の子の夜宮にいさむ鼓かな」の1点のみであった。双方の本文中に表わされた共通の俳諧は、2点であった。『江戸名所図会』の挿絵にあり、また『東都歳時記』の本文中にみられた俳諧は5点であった。このように、挿絵・本文中に限らなくとも共通する俳諧は8点のみであった。

同一の著者であるにも関わらず、このような相異がみられる要因としては、『江戸名所図会』が場所(空間)に主眼を置いていたのに対し、『東都歳時記』が花見や御開帳の時期(時間)を重視していたことが考えられる。

105 19世紀日本と英国における「文化的景観」および風景評価の着目点に関する比較—近世日本の名所案内記と同時代英国の旅行文学をもとにして—

阿部美香(同志社大・非)

発表者はこれまで近世後期の版本や浮世絵等を研究材料とし、日本の文化的な風景に関する一つの指標、また同時代人による風景への見方や意識を提示してきた。しかし「日本文化としての風景とは何か」という議論を発展させるためには、他国と比較した上で日本の風景を論じることが必要である。先行研究で19世紀後半の英国への、日本人庭師招致の事例があり、風景構築に関わる日英間の交流を着想した。ゆえに比較対象を英国とした。本発表の研究目的は、日本と英国の出版物に描出される風景・風景観を比較し、両者の違いを解明することである。

研究対象は、日本のものとして歌川広重作『絵本江戸土産』、および齋藤父子三代編・長谷川雪旦画『江戸名所図会』の二点を取り上げる。前者は江戸の名所絵とともに、その場所を説明する歌川広重の文章が記され、広重の風景に対する記述が最もまとまった形で認められる。後者は江戸に関する名所案内記の中で最も総合性が高いものである。英国のものとしてPriscilla Wakefield作“A Family Tour through the British Empire: containing some accounts of its manufactures, natural and arti-

cial curiosities, history and antiquities”を対象とする。Wakefieldは英国全土の都市・農村状況を、同時代の他作品に比し写實的に描出した作家と評される。対象の旅行文学は、スコットランド、ウェールズを含む英国全土を登場家族が旅行し実見していくという内容であり、家族の体験談という形で話が展開する。研究方法は、“Family Tour”における風景描写をその風景への評価や着目点とともに抽出し整理した上で、上記の名所案内記と風景の性質ごとと比較をする、というものである。

その結果以下のことが明らかとなった。①日英で共通する見方として、眺望の良さへの好感、が上げられる。これはアプルトンによる眺望優位性の議論とも重なる。②大規模な建物・事物への感嘆も日英共通である。宗教施設・祭礼、学問施設等に特徴的に見られる。③職人への見方に関し、日本では社会機能の一部として、英国では職人の技術をartと表現する点に相違性が認められる。④「収集すること」への見方に関しても、由緒ある物を収集する日本と、由来に関わらず、外観美や珍しさを基準に収集する英国、という差異が見られる。⑤田園観や荒野観でも相違があり、「荒野を風雅・風流と見なす」ことが日本に特異的である可能性を指摘できる。英国では「肥沃な大地への賞美と荒野への嫌悪感」という視点が認められた。また既往の英国田園観研究では、18世紀末からは荒野に対し恐怖と快感、双方の感覚を抱くとされるが、本研究から19世紀においても理想的な田園風景への賞美を見出しうることも指摘できる。

106 長崎西坂におけるカトリック巡礼地の成立とその背景—日本二十六聖人殉教地を事例に—

阪野祐介(韓国海洋大学校)

西坂のカトリック巡礼地を事例として、「物語、展示、演出」という歴史の提示形式を手がかりに当地が巡礼地として成立していく経過とその背景について考察する。西坂は1597年2月5日に日本で起きた最初の大規模なキリシタン殉教の地であり、2012年に日本初の司教団公認巡礼所となった。

西坂が殉教地として確定したのは1947年で、西

坂の公園化と殉教記念碑建立が決定された。それは、長崎の戦後復興および観光資源化を背景として進められ、各種イベントの開催を通して二十六聖人殉教の記憶を固定化していく。1956年4月6日長崎県史跡に西坂が指定されると、翌年2月再び日本二十六聖人聖地の保存の動きが活発化し、かつて長崎を本拠としていたイエズス会も参画し、市、保存会、教区、修道会の協力関係が築かれた。1962年、日本二十六聖人列聖百年を記念する行事にあわせて西坂公園にブロンズ像が組み込まれた記念碑が設置され、記念館が開館した。道を挟んだ東側の土地に聖堂も建設され、また同年1月には記念館初代館長の結城了悟神父が『26聖人の殉教史長崎への道』を出版し、物語と展示の空間が整えられた。

物語をその根拠として配列される展示物は、一方で見るとその物語の真实性を高める効果を発揮する。西坂の記念館に二十六聖人のうちの二人の聖遺骨が納められているように、カトリックにおける巡礼地の多くは、聖遺物が安置されており、巡礼地の宗教的価値を高めるものと言える。ただし、聖遺物それ自体にはなんら自らの価値を明示することができず、「しかるべき容器」を必要とすることが指摘されている。しかるべき容器に安置されることで、聖遺物はその聖性、すなわち真正性を獲得し、他方ではその聖遺物の存在が、それにまつわる物語と場所の真正性を保証する。

もうひとつ重要なのが、その記憶を効果的に提示する「演出」である。西坂でみられる演出は大きく二つある。一つは記念祭であり、一つは巡礼である。二十六聖人列聖百年祭をはじめとした記念祭は宗教儀礼のひとつであると同時に観光イベント的要素も有し、大衆の関心を引きつけながら、行政、宗教集団、新聞社、商工会議所など長崎をあげて二十六聖人の歴史を語る時間と空間となっていた。そして京都から長崎までの巡礼は、二十六聖人の殉教の歴史の再現であり、「歴史の体験」と捉えることも可能であろう。

以上のように、西坂は近世期の刑場から近代の忘却を経て、戦後復興や長崎固有の歴史的・文化的価値を見出そうとする観光という文脈とカトリックにおける宗教的価値にもとづく意味づけとが絡み合いながら、殉教者の記憶を想起させる場

として成立してきたことがわかる。

201 共同炊事と集団食からみた尾西織物業地域と周辺農村の近代一起共同炊事組合・鈴鎌工場寄宿舎の史料に着目して一

湯澤規子（筑波大）

本研究は、尾西織物業地域を事例として、近代における産業地域形成と農村との関わりを明らかにすることを目的とした。主な史料として起共同炊事組合史料、鈴鎌毛織工場史料を用い、労働力・資本・物資（食糧・燃料・肥料）の循環に着目することを通して、工業と農業との関わりを考察した。

まず、『工場統計表』によって全国の工場数・職工数の分布と推移を把握すると、両者は明治末期から大正期にかけて増加し、中でも東京・大阪・愛知では著しい集積がみられた。三都市を比較すると、繊維を主軸としていた愛知県では女工数の割合が高い特徴がみられる。愛知県の繊維産業を支える中心地の一つであった尾西織物業地域では、家内工業で生産されてきた綿織物業が衰退した後、工場での大量生産へと転換した毛織物業が勃興した。尾西織物業の中心地域であった愛知県中島郡起町に設立された鈴鎌工場はその代表的事例の一つである。これらの工場へ、県内外から多くの女性たちが女工として流入した。

次に、工場で働く女工たちの暮らしを寄宿舎および共同炊事の実態から検討した。大工場は自炊場を持ち、中小工場は1917（大正6）年に織物業者の有志34名の出資により、「起共同炊事組合」を設立した。共同炊事組合はその後、全国各地の産業地域に設立されたが、起共同炊事組合はその嚆矢に位置づけられる。両者の献立実施表を復原すると、主食と副食（汁と漬物）によって献立が成り立っていた。共同炊事はその後も1940年代まで順調に運営され、配食数も増加した。

このような大量の食糧需要を支えたのは周辺農村であった。この時期において、名古屋近郊地域が都市近郊蔬菜栽培地域としての発展をみた背景には、工場のほか、軍隊、都市の大きな需要があったとみられる。特に、主要作物であった漬物用の「宮重大根」、切干用の「方領大根」は、栽培の近代化のみならず、加工・流通・組織の面でも大きく発展し、京阪神地域を始め、全国的な市

場を獲得した。また、鈴鎌工場の『肥料渡帳』によると、寄宿舎の糞尿を下肥として周辺農家へ販売するとともに、それらの農家から大根を購入していたことがわかり、このような物資の循環を通して、工場と農村が直接的に関わっていたことも示唆された。

以上の分析を通して、綿織物から毛織物へと推移し、機械化と工場化が進んだ近代尾西織物業の構造転換は、女工の流入と人口増加という地域変化を引き起こし、周辺農村で生じた農業生産の近代化はそれと相互連関しながら展開したことが明らかになった。つまり、地域の工業発展は農業を含む社会経済全体の変革過程であり、近代という時代は労働力・資本・物資の供給体制および市場が再編成された時代といえることができる。

202 わが国におけるアユ養殖業の発達史

井村博宣（日本大）

アユ養殖業は、1960年頃以降わが国の内水面養殖業を代表する重要な養殖種類へと発展してきた。これまで筆者は、アユ養殖業およびその関連産業の展開等について、主として個別の産地や事象ごとに考察を加えてきた。本研究では、それらの分析結果を踏まえたうえで、アユ養殖業を先導してきた滋賀・徳島・和歌山などの主要産地を中心に、各産地を一体的に捉え、養殖技術の伝播と変化に留意しながら、同養殖業の展開について産業発達史的側面から考察した。その結果は次の通り要約される。

滋賀県では、1930年からコアユ（河川放流用種苗）の全国配給が県営事業として本格的に実施された。アユ養殖業は、その配給業者（採捕漁家）が余剰な稚魚を畜養で培った飼育技術にて成魚化する形で、1930年代に副業として始められた。1960年頃、日本経済の高度成長下で東京・大阪を中心にアユ需要が急増すると、安曇川平野では、これら大都市向け養殖アユの産地形成が、北船木の漁家層（採捕、配給）等により進められた。その養殖は、伝統的な素掘りの池に湧泉・河川水を注水し、鮮魚・蛹等を投餌する粗放的経営が一般的で、立地は湧泉のある扇端（低位生産性田）に集中、生産性は低かった。

この間、徳島では那賀川総合開発に伴うダム建設で、経営の将来性を危惧する天然アユ産地問屋

が、1953年に神戸の問屋を介して滋賀等から養殖技術を導入、県水産課の助力を得て、1960年頃までに導入時とは異なる大量の地下水とコンクリート池を用いた近代的な量産型養殖技術の開発に成功していた。産地問屋は、前述の需要増大で養殖経営が軌道にのると、那賀川平野左岸地域で河川漁家（半農半漁）・稲作農家へ地廻りの開拓を進めた。これに血縁・地縁・職業的繋がりでの盛況を知ったミカン農家ほか多様な資本が投機的な目的で水条件等の良い右岸地域に参入、平野のほぼ全域に近代的な量産型養殖池が広がり、1960年代中頃に那賀川平野は全国最大の産地となった。経営体数の増加は、大手資本の本格参入を呼び餌の配合餌料化をもたらす反面、種苗不足を招いた。徳島の養殖業者が種苗を求めて東奔西走する中で、量産型養殖技術は和歌山等へと伝播した。

和歌山では、地下水化・配合餌料化で立地の制約が緩和したこともあり、1970年頃から和歌山平野上流地域で徳島の盛況を知ったミカン農家がアユ養殖業を導入して高収益を上げると、その情報を入手した多様な資本が水条件等の良い下流地域に参入、徳島型の養殖技術を用いた大規模な産地の形成が進んだ。その後1973年の第一次石油危機に伴う生産費の高騰と漁価の低迷、収益の低下で、徳島を中心に規模の経済を追求する動きが顕在化すると、和歌山平野では、地元海産種苗が池面積に応じて配給される地域的な条件の影響を受けて外面的拡大が進み、大規模な工場型の養殖池を所有し、雇用労働力に依存した企業的経営の発展をみた。

203 近世後期における過去認識と災害情報の社会的受容

堀 健彦（新潟大）

越後国には康平3年と寛治3年の作製年をもつ2種の絵図が存在する。それぞれ康平図、寛治図と呼び慣わされてきた2種の絵図は、平安越後古図と総称されている。絵図の主題は、寛治6年の地震および津波によって越後国に大規模な地形変化が発生し、日本海に突き出していた半島が水没する一方で、信濃川下流域の大規模な水域が埋め立てられ、現在の越後平野が形成されたことを表現した絵図である。

かつて海であった地域が陸化して広大な平野が

形成されたと主張する同種の絵図として、関東平野を描いた江戸古図、濃尾平野を描いた尾張古図、大阪平野を描いた浪速古図などがある。平安越後古図も浪速古図や江戸古図のように近世後期の創作であり、歴史地理的な視点のもと、復原された考証図としてとらえることができる。

そのような行為の背後には、近世後期における国学の影響下における過去に対する関心の高まりがあったことが、平安越後古図についても他地域の古図についても想定されてきた。しかしながら、平安越後古図の作製と流布が近世末期に盛んに行われた背景として、文政11年に発生した越後三条地震の存在が重要であると考えられる。越後三条地震は、多数の死傷者を出しただけでなく、噴砂や液状化現象が発生したことが文献史料および考古資料によって確認できる。

平安越後古図のうち、より古い段階で作製され、流布していたと推定できる寛治図の書写年の多くは文政10年となっており、定型化した形で絵図の文字記載中に盛り込まれている。

文政11年に発生した地震による被害を背景として、平安期の地震・津波による大規模な地形変化を主題とした古図が創作され、流布した可能性を想定することが可能である。その傍証として、越後三条地震により越後が壊滅的被害を被ったという口承が発生し、譬女により語られたことは示唆的であろう。

寛治図は近世後期から多数の写図が作製されており、多くの人の関心を惹いていた。寛治図2枚の写図を残している小泉蒼軒は、文政の末年頃から古図が国内諸方に流布したが、その真偽が論じられていたこと、出所が不明であったことを記している。紀興之は、近世地誌『越後土産』に簡略化した寛治図を掲載しているほか、『越後国年代記』では寛治図所載の寛治6年の津波を過去の災害として採録している。神戸市立博物館蔵の「往昔越后州之図」は、栃尾の富川氏所蔵の図を弘化3年8月に原昌言が書写し、さらに同年11月に成澤寛経が書写したものである。原昌言は善光寺地震に際して「信濃国大地震之図」を出版した人物であった。

これまで古図の作製背景として国学の存在が指摘されてきたが、災害を契機とした地域文化／地域の歴史への関心の高まりも古図の創作と受容に

大きな役割を果たしうる可能性を示している点で、平安越後古図が古図研究の中で占める位置を有すること考えることができよう。

204 衛星データと古図等の融合による出島の建設に関する研究

中野不二男（宇宙航空研究開発機構）

山敷備亮（京都大）

田殿武雄（宇宙航空研究開発機構）

根本 茂（株・ブロードバンドタワー）

長崎市の中心部に現在も遺跡の一部が遺る出島は、江戸幕府による鎖国政策の象徴である。また出島は、シーボルトの著書「NIPPON」に掲載された絵図、あるいは肥前長崎図など著名な古絵図に描かれているように、扇形の人工島として知られている。

その出島の形状は、どのようにして決定されたのか。本研究は、宇宙研究開発機構（JAXA）の地球観測衛星「ALOS（だいち）」のデータを活用し、出島建設の位置決定について、現地での調査を行ったうえで考察している。

出島が扇形であるなら、その形状の決定には、「中心角」が重要になる。しかし、出島の建造がはじまった寛永11（1634）年、すなわち江戸時代初期の我が国には、「角度」の概念がなかったとされる。また扇形であったと仮定した場合、その中心は400m以上内陸になければならないが、そのような基準点が存在していたという記録は確認されていない。

一方で、正保4（1647）年の「長崎古地図（正保四年南蛮船渡来二付諸侯布陣長崎港図）」のように、出島が多角形で長崎湾を描いた古図も少数ながら存在する。また現存する遺構を観察すると、出島の南岸には「角」のあることが、目視でも確認できる。こうしたことから、建造時の出島の形状は、少なくとも南側の護岸壁が5辺あるいは6辺からなる多角形であったと考えることは自然である。

我が国は古くから寺社建築の経験により、勾配の技術は保有していた。出島は、連続した勾配により、扇形に近い多角形だったと考えられる。多角形の護岸壁を建造するとき、その基準点が必要になる。正保4年の「長崎古地図」には、多角形の角の1つから、2本の赤い直線が記されてい

る。1つは長崎湾の東岸、もう1つは西岸のどこかと結ばれている。しかも2本の直線は、ほぼ「矩」、すなわち直角をなしている。したがって2本の直線の交点を出島建造の基準点とし、勾配の始点としていた可能性がある。ただし長崎湾は繰り返し埋め立てられているため、出島建造時の海岸線は不明である。そこでコンピュータ上において、「ALOS(だいち)」によって取得された画像データと標高データを組み合わせて3次元の地形を構築したうえで、ヴァーチャルな海水面を設定する。この海水面を上昇させてゆくと、東岸では梅香崎中学校、西岸では恵美須神社が、2本の赤い線と結ばれる位置であることがわかった。

その結果、正保4年の「長崎古地図」に描かれている2本の赤い線は、出島建造の基準点を示すものであったと推定された。また出島の建造は、角度の概念がなかった時代において、2本の線による「矩」と、その交点を始点とする「勾配」という、日本の伝統的な技術を活用して進められていたものと考えられる。

205 明治中期の鹿児島県における海外移民送出地域の拡大—沖縄県との関わりに注目して— 花木宏直(琉球大)

本研究は、明治中期の鹿児島県における海外移民送出地域の拡大の経緯を、沖縄県をはじめ隣接府県との関わりに注目し明らかにすることを目的とした。方法として、渡航者名簿や新聞広告、外務省外交史料館所蔵「移民会社業務関係雑件」を組み合わせ、幹旋を行った者の実態と募集の展開を検討した。本研究を通じて、海外移民の送出に関する先行研究や自治体誌の記述の少ない九州地方において移民研究の基礎資料の整備に貢献することと、沖縄県における海外移民送出地域の成立を沖縄県外の諸要因をふまえ再検討することを目指した。

明治30年代前半、鹿児島県および隣接府県では、鹿児島県川辺郡や始良郡と沖縄県金武村といった一部地域に海外移民の送出が限定されていた。渡航者は主に平民であり、鹿児島県では北米へ、沖縄県ではハワイへ渡航した。明治30年代半ば以降、移民会社の幹旋により、鹿児島県全域や宮崎県西部、沖縄本島全域へ海外移民送出地域が拡大した。これらの地域では、仙台移民と東洋移

民の幹旋による渡航者の比率が高かった。

仙台移民は、ハワイ移民の募集のため明治36(1903)年4月上旬に鹿児島県へ進出し、日置郡伊作村中原7番地に鹿児島県や沖縄県、宮崎県で初となる移民会社の出張所を設置した。この出張所は、近世期の郷土であり、近代期以降は伊作村会議員といった公務に従事する篠原政行の邸宅であった。また、初期の渡航者の大半は伊作村をはじめ日置郡出身の士族であり、多くは渡航後ハワイからアメリカへ転航し商業の経営に従事した。その後、仙台移民は鹿児島県全域へ幹旋を拡大して、士族だけでなく平民へも募集を行った。また、明治37(1904)年2月以降は沖縄県へも進出し、首里区出身の士族を中心に幹旋を行った。彼らは渡航後、ハワイで商業の経営に従事していった。

東洋移民は、明治37年3月から6月にかけて、宮崎県と鹿児島県、沖縄県にて一体的にメキシコ移民を募集した。業務代理人には、宮崎県北諸郡高城村出身の士族で通訳や公務に従事した安田愉逸や、鹿児島県日置郡永吉村出身の士族で日置郡会議員をはじめさまざまな公務に従事した能勢敏哲が就任し、宮崎県と鹿児島県を担当した。また、沖縄県では、鹿児島県揖宿郡指宿村出身の寄留商人である肥後孫左衛門が業務代理人となり、自身が社長を務める海運会社の影響力が強い国頭郡で主に幹旋を行うとともに、那覇区周辺でも首里区出身の士族である徳田安敦の協力により幹旋を行った。

つまり、明治中期、鹿児島県や宮崎県、沖縄県ともに海外移民の急増がみられたが、幹旋において士族が重要な役割を果たしていた。また、渡航者の多くは、士族による海外への移住と商業の展開といった側面がみられた。

206 アメリカ合衆国におけるロシア系ドイツ人の移住とエスニック文化の再生

矢ヶ崎典隆(日本大)

ロシア系ドイツ人は多民族社会アメリカにおける一つのエスニック集団である。1760年代にロシア女帝のエカチェリーナ2世のヴォルガ川流域の植民開発政策の刺激を受けて、ヘッセンを中心としたドイツから2万数千人のドイツ人がロシアに移住した。彼らはカトリック系とプロテスタント

系の人びとで、宗教の自由や兵役の免除をはじめとするさまざまな優遇措置の恩恵を受けて、104の孤立した農業集落を形成し、不慣れな草原の環境に適応した。一方、19世紀初頭にはドイツから黒海の北岸地域への集団移住が行われた。また、メノナイトもロシア領に移住した。こうしたドイツ人集落ではドイツ語とドイツ文化が維持された。しかし、ドイツ人のロシア移住の開始から1世紀を経た1870年代にはロシア化政策が推進され、それまでドイツ人に与えられた特権が剥奪された。その結果、ロシア領のドイツ人は南北アメリカの草原地域へ移住した。

新大陸に渡ったロシア系ドイツ人にとって、アメリカのグレートプレーンズは主要な移住地となった。ヴォルガ川流域の出身者はヴォルガジャーマン (Volga German) と呼ばれ、主にカンザス州とネブラスカ州に流入し、農業集落を形成したり、甜菜農場での農業労働や鉄道建設事業に従事した。プロテスタント系のヴォルガジャーマンはアメリカ西部の甜菜産業の展開に主要な役割を演じた。一方、黒海北岸地域の出身者はブラックシージャーマン (Black Sea German) と呼ばれ、ノースダコタやサウスダコタに入植して農業に従事した。

アメリカ社会は1970年代に入ると多民族の存在に寛容になったが、ロシア系ドイツ人の移民組織、すなわち、ロシア系ドイツ人アメリカ歴史協会 (American Historical Society of Germans from Russia) とロシア系ドイツ人伝統継承協会 (Germans from Russia Heritage Society) が誕生した。前者はヴォルガジャーマンの団体で、ネブラスカ州リンカーンに本部を持ち、全米に41支部、カナダ西部に4支部を有する。後者はブラックシージャーマンの団体で、ノースダコタ州ビスマークに本部を持つ。ロシア系ドイツ人アメリカ歴史協会は、毎年、アメリカ各地で年次大会を開催する。本部には移民博物館、図書館が完備され、機関紙が発行される。カリフォルニア州フレズノには最大の支部があり、小さな博物館と図書館が運営されている。移民博物館は、ロシア系ドイツ人が自らのエスニックアイデンティティを再確認する空間である。子どもの教育用に塗り絵、食事、歴史、文化などを紹介しながらドイツ語を学ぶためのテキストも作成されている。アメリカ社会で

は家系研究が人気であるが、ロシア系ドイツ人が家系を研究するための主要な場が提供される。このようなロシア系ドイツ人は、アメリカのドイツ系社会において特異な存在である。

207 都心と郊外農村を結ぶ路面電車ネットワーク —20世紀初頭マルセイユの事例を中心に— 國府久郎 (長崎外国語大)

路面の軌道上を走行するトラムウェイ (Tramways, 路面鉄道) は、1870年代以降、馬を牽引力としてヨーロッパ諸都市に普及し、1890年代以降、路線の電化とともに急速に発展した。フランスでは、19世紀末から1930年代初頭までに、特に地方大都市において路面電車の路線網が整備され、郊外化が進行した。1920年代には、路面電車は都市生活に不可欠な要素の1つとなっていた。都市化は全体として、路面電車を始めとするインフラストラクチャー (上下水道、ガス・電気、電信・電話など) のネットワークが構築されながら進んだ。それゆえ、1870年代から1930年代までの都市化を理解するうえで、ネットワークの概念は重要であるといえる。路面電車のネットワーク、つまり路線網は具体的には鉄のレールと架線から形成されていた。他の様々な都市インフラのネットワークと比較して、都市中心部と郊外を結ぶ路面電車の交通網は、当時の住民の目に最も直接的に、はっきりと映るものであった。本報告では、マルセイユの郊外農村部やその住民たちにとっての、こうした可視的な路面電車ネットワークの意義を明らかにする。史料は主に20世紀初頭の絵葉書や、当時の文献、回想録、国勢調査原簿などを使用した。

路面電車と絵葉書は、20世紀初頭に同時に黄金期を迎えた。路面電車は近代化の象徴として、写真家に好まれて撮影され、数多くの絵葉書となった。鉄のレールと架線からなる路面電車のネットワークは、郊外住民にも強く意識された。19世紀以前より、遠くの郊外農村部にまで達していた道路の上に、都心のカンヌピエール通りから放射状に広がる路面電車のレールが敷かれたことで、郊外の村々と都心のつながりが強化された。第一次大戦までに路線網が拡張し続けた結果、かつては自給自足の生活を営んでいた農村部も、徐々に大都市の郊外街区へと変貌するに至ったのである。

さらに、村々への路面電車の到着は、同時に架線による初めての電気供給を意味した。各家庭への電気供給は両大戦間期を待つ必要があったが、それでも、自分たちの村への路面電車の到着は、近代的な生活を感じ得る第一歩となったのである。そして、路面電車の終点や停留所には、飲食店が開かれるなどして、人々が集まる街区の小さな中心が生じた。そこから郊外農村部にも、都市的な生活様式や価値観が浸透していったのである。都市と農村の2つの世界が交差する場となった路面電車の終点に、好奇心旺盛な子供たちが集まり、この新しい交通手段に自然と慣れ親しんでいった。彼らが成長した時には、村では見つけられないような魅力的な仕事に、路面電車で通勤して就けることが可能となった。両大戦間期のフランス大都市圏における、第三次産業の従事者の増加は、こうした都市公共交通ネットワークの整備なしには、起こり得ない現象であったのである。

208 マイナー軍港都市の近現代—要港部が置かれた都市—

柴田陽一（京大・研）

シリーズ「軍港都市史研究」（清文堂）は、2014年5月現在までに、第1巻 舞鶴編、第2巻 景観編、第3巻 呉編が刊行済みである。今後は第4巻 横須賀編、第5巻 佐世保編、第6巻 要港部編、第7巻 政治・経済編が予定されており、報告者は景観編の旅順に続き、要港部編の第1章「要港部の置かれた都市の特徴」（仮）を担当することになった。本シリーズは軍港都市の特徴として、①寒村から重工業都市への変貌（海軍工廠の設置）、②人口急増（流動性の高さ、社会増加の割合の高さ）、③財政基盤の脆弱さ、という3点を挙げている。しかし、これらの特徴は鎮守府が置かれた都市（横須賀・呉・佐世保・舞鶴）を念頭に指摘されたものであり、要港部が置かれた都市（大湊・竹敷・鎮海・旅順・馬公）にも当てはまるとは限らない。また、「植民地」に置かれた要港部では、民族間における居住分化や職業の差など、「本国」の鎮守府では見られない現象が起きていることが想定される。そこで本報告では、要港部が置かれた都市を鎮守府と比較しつつ検討し、後者に偏した軍港都市論を相対化しようと試みた。

まず、各軍港の位置と機能の変遷を確認し、日清・日露戦争、韓国併合、ワシントン海軍軍縮条約とその破棄を機に、軍港の設置／廃止、格上げ／下げが行われたことを明らかにした（例 廃止＝竹敷、格下げ＝旅順・舞鶴）。つづいて、各軍港が置かれた地域の特徴を同じスケールの地図を用いて比較検討し、鎮守府と比べて小規模な湾に置かれ（鎮海は例外）、また鉄道の開通も遅かった（もともと鎮守府が置かれた旅順は例外）要港部は、産業発展の可能性に乏しく、補給・修理といった限定的な機能しか持ち得なかったことを指摘した。それにもかかわらず、各種統計書を用いて人口変遷を調べると、要港部が置かれた都市は一時的にわずかに減少したこともあるが、基本的には急激ではないにせよ増加を続けていることが判明する。旅順を例に職業別従事者の割合を見ると、農業だけで半数を超え、工業・商業・「公務自由業」が同じく8%前後という値を示す。こうした割合は、鎮守府が置かれた都市のそれとは大きく異なっている。この事実こそ、要港部の人口がほとんど減少しなかった理由と考えられる。また、旅順では中国人の6割が農業に従事（「公務自由業」は4%）し、日本人は半数近くが「公務自由業」（次に多いのは商業の16%）に従事するというように、民族別に大きな差が見られるのだが、こうした現象は当然ながら「本国」の軍港では見られないものであった。

以上から、要港部が置かれた都市は、①目立った産業がなく、陸上交通も不便であるにもかかわらず、まさに要港部が置かれた故に命脈を保ち得たような都市（大湊・鎮海）、②学園都市・政治都市・陸軍司令部所在地など別の性格を併せ持つ都市（旅順）、というように、同じ軍港都市とはいえ、海軍工廠の設置により重工業都市に発展したという鎮守府とは大きな違いあることが明らかとなった。

209 明治期京都における旧市街の変容—市街空間地を手がかりとして—

鈴木亜香音（佛大・院）

天皇東遷後に衰退したという京都については、勸業政策・三大事業といった諸事業の分析を通して、再生と近代化に関する研究が多方面から進んでいる。しかし、その多くは下京（三条通以南）

や鴨東を対象としており、天皇東遷による影響を直接的に被った上京に関する言及はほとんどない。そこで明治期上京について、とくに空閑地が広く出現した御所西地区を対象に再市街化の実態を検討し、明治期京都の再生、近代化を考える出発点としたい。

明治12(1879)年の「空地取調簿」によると、京都には約15万7千坪の市街空閑地があった。そのうちの約12万坪が上京区にあり、とくに藩邸や公家屋敷の跡地が多くあった御所周辺に集中していた。上京区では明治22(1889)年時点で丸太町通以北に多く残存していた市街空閑地が、明治42(1909)年になると分散的に一部を残すだけになっている。明治20年代から明治末にかけて上京は再市街化をほぼ完了したといえよう。

再市街化の実態を分析するために上京区の職業構成比(明治44(1911)年)をみると、鉱工業約52%、商業・交通業約24%、公務・自由業約8%、その他約16%である。全体的に鉱工業(特に繊維業従事者)が多数を占めていることを踏まえて区内の職業構成上の地域的特徴をみると、北西部に繊維業従事者が圧倒的多数を占める地域が広がり、東南部に商業・交通業従事者割合の高い地域が、東部に公務・自由業従事者割合の高い地域が分布している。

上記3地域の接点は御所西地区の17組・20組・21組付近である。このうち17組は組内に上京区役所(明治12年)があり、京都府庁(明治18(1885)年)等にも近接していたためか、公務・自由業従事者割合が高い。この17組における再開発を町内西側がほとんど市街空閑地であった甲斐守町(油小路通中立売下ル)の事例にみてみよう。「空地取調簿」によると、甲斐守町西街区には12筆の市街空閑地(鳥取藩邸跡地)が分布していた。明治末期作成の『戸別略図』ではそこに2本の路地が通り、居住者名を記載した40軒近い小規模住宅が描かれている。これを『京都地籍図』と対照させると、12筆の土地所有者は同一かつ他町居住であり、土地区画と無関係に住宅地として開発していたことが分かる。居住者の職業は不明であるが、明治維新後の東京と同様に、大規模な市街空閑地が小規模住宅によって充填され再市街化したのが、この甲斐守町である。

明治末期までに再市街化した上京、とくに御所

西地区には、職業構成からみれば公的機関の設置とそれともなう公務従事者の居住と西陣を含む周辺地域からの需要という複数の再市街化要因が見いだせる。しかし、甲斐守町の事例からわかるように、各種職業従事者の分布が当該地域の社会経済状況の直接的表現になっていないこともある。したがって、土地利用と利用者の実態を十分に把握し、考察していくことが求められる。

210 正保常陸国絵図の編集図—原本調査に基づく表現内容の検討—

石井智子(茨城大・院)

本研究では、江戸幕府撰正保常陸国絵図とは異なる表現様式の手書彩色図で、江戸幕府撰正保常陸国絵図の約4分の1に縮小された、村高や一里山が図示されていない編集図を研究対象とする。これらの正保常陸国絵図の編集図の所在・原本調査をもとに図形・表現内容を検討し、編集図が作成された理由を考察する。

写された近世絵図に関しては、服部(1989)、前田(2000)、上杉(2002, 2007)、小野寺(2005, 2006, 2008)、堀(2008, 2010)、大浦(2009)の指摘や研究が行われてきた。これらの研究方法に学びつつ、茨城県、栃木県ならびに旧下総国に該当する千葉県自治体史や古文書所在目録、また歴史系博物館などの所蔵データベースより常陸国絵図を検索し、その所在を調べ、原本調査を行った。次に撮影画像をもとに、絵図の図形を基準に分類を試み、村名、寺社の図像など表現内容を検討した。さらに、絵図を所持した原所蔵者と絵図を現在所持する現所蔵者が同一の場合は、聞き取りと古文書調査を行った。

この結果、正保常陸国絵図の編集図を51舗確認した。この内、原本調査をした絵図36舗、画像等で確認できた絵図は5舗である。これらの絵図の図形の類似性に着目し、7つのグループに分類した。さらに、村名などから表現内容を分類した結果、一部の図形グループに属する絵図は元禄期の村名に変更され、他のグループでは正保期の村名を一部元禄期の村名に直した絵図もあるなど、図形グループ内での統一性が見られない。

正保常陸国絵図を写した人々ならびに関わった人々は1)森幸安、長久保赤水、色川三中といった学者や地図製作者、2)旗本、譜代大名の家臣、

3) 名主や商家の地方文化人の3つに分けることができる。

正保常陸国絵図の編集図の原所蔵者を茨城県内と近隣県に絞り、分類別分布を見ると、現在の桜川市真壁町付近と土浦市、つくば市の商人で名主でもあった地方文化人が正保常陸国絵図の写しを行った例が多いことが明らかとなった。このことより、筑波山南西部の地方文化人の間に交流が形成されており、彼らが正保常陸国絵図を写したと考えられる。

さらに、年代が判明する絵図に限っては、享保期から化政期までに写された絵図が多く、19世紀初頭に正保常陸国絵図の編集図に関連した同時代人が多いことが分かる。以上より、正保常陸国絵図は18世紀から19世紀の初頭にわたって写されたことが明らかになった。

しかし、正保常陸国絵図の編集図が同一の系統とは判断できない。まず、18世紀中頃に森幸安や長久保赤水を始めとする著名な学者や地図製作者によって、地誌編纂を目的として正保常陸国絵図が編集された。その後19世紀初頭に地誌に対する再びの関心から色川三中のような学者、また財力のある商人や名主の人々が正保常陸国絵図を写したのではないかと考えた。なお、正保常陸国絵図を正確に写したものは無く、かつ考証を加えたか判別できない例が多く、写図や考証図ではなく、あえて本研究では「編集図」と呼んだ。

211 アメリカ議会図書館蔵の日本関係地図

鳴海邦匡（甲南大）

アメリカ議会図書館（The Library of Congress, 以下、LC）は米連邦政府の図書館であり、その規模から世界最大の図書館とされる。所蔵資料は、資料の特徴（地域、形態等）に応じ様々なDivision毎に管理され、日本関連資料の多くはアジア部日本課（Asian Division, Japanese Section）で管理される。そのため日本関連資料のこれまでの調査は文献が主であったこともあり、同課の資料を中心としてきた。一方、本報告で紹介する地図は、地理・地図部（Geography and Map Division, 以下、GM）が管理しており、日本関連資料も同様である。そうした状況も反映し、日本関連地図の体系的調査はこれまで実施されなかった。

マディソン館の地下2階に位置するGMは、面

積約8,400m²と広大であり、地図だけでも550万枚以上を有する。書庫のマップケースに収められた地図は、タイプ、地域スケール、主題、年代の階層に従い収蔵される。資料は基本的にオンラインのDB検索で探すか、1969年から始まる新管理以前の配置によって管理される資料も多く、新旧管理が混在する。日本に関連する地図も、こうしたルールのもとGMに架蔵される。

日本関連の地図がLCに受け入れられた経緯をみると、幾つかの機会が認められる。まず、1800年代後半、日本大使館等を経て米機関（省、スミソニアン等）にもたらされた資料が、後にLCに移管されたケースで、この頃は交換や寄贈が主であった。次ぎは1900年代初めに、朝河貫一がLCとYale大学の依頼により日本で購入したケースである。積極的な予算化を伴う購入は、1930年代、当時LC勤務の坂西志保が主導し日本で購入したケースもあった。その後、第二次世界大戦後の日本からの接收資料が、米政府機関（WDC、AMS、CIA等）を経て、LCに移管された地図があり、このルートによる資料がGM蔵の日本関連地図として最も多い。こうした経緯は、地図に残された鉛筆書きのメモやスタンプ等から判断される。もちろん受け入れは現在も続いている。

LCに受け入れられた日本関連地図の内、前近代の資料の把握から始めたい。GM架蔵のこうした地図は260点程であり、全体の3割近くを朝河、4割近くを坂西が購入している。これらの図は木版刷りの図が多く、また、関東近辺、特に江戸図のコレクションが充実している。そうした購入の経緯や方針を反映し、コレクションは比較的手し易い図が多い。この点について、他の在外日本地図コレクションとの共通性があるのか、検討する必要があると考えている。

一方、購入以外の経緯で移管された資料のうち、1800年代後半と第二次世界大戦後の接收にからむ資料には、他に例のないものが含まれるケースが多い印象である。ただし、これらの図は、他の近代以降の図と同様に、様々なルートを経て最終的な収蔵先としてLCに辿り着いた資料といえ、そのことが理解を難しくする。その理解を進めるため、次ぎの課題として、接收関係地図の全容の把握につとめたいと考えている。

212 埼玉県における清酒業の存続とその要因

一 平成期を中心として一

宮坂 諒（日本大・院）

わが国における清酒（日本酒）製造の歴史は古く、江戸期には灘・伊丹や伏見などの大産地が形成され、明治期以降、酒税増収を目指す政府の振興策（国立醸造試験所・現独立行政法人種類総合研究所の設置等）もあり、全国的に顕著な発展をみた。しかし、1970年代前半をピークとして清酒業は、生産量・製造免許場数（蔵元数）ともに、酒類消費の低下と嗜好の多様化や、清酒離れ等の影響を受けて減少傾向が著しく、産地・業者間で競争の激化、再編成が顕在している。

そこで本報告では、現在製成数量が全国6番目、出荷量が全国4番目に多く、関東地方最大の産地である埼玉県を対象に、この再編成期における清酒業の存続要因について、平成期を中心に考察した。

埼玉県は、近世から近代にかけて、多くの滋賀県出身・新潟県出身の酒造家が出店し、その適切な立地選択や高い酒造技術により発展、大正期には、10万石以上を生産する関東地方最大の産地へと成長した地域である（青木、2003）。

しかしながら平成期において、埼玉県全体の製成数量の減少率は全国的に見て低いものの、蔵元数の減少率は東日本で最も高く、衰退傾向が顕著である。そこでまず、存続している蔵元の特徴を明らかとするために、各蔵元の創業者の出身地を青木（2003）と聞き取り調査結果を基に、規模を『全国酒類製造名鑑』醸界タイムス社、1982を用いて分析した。その結果、創業者の出身地別の割合には、昭和期と現在に大きな変化は無く、近代のような特定の系譜の酒造家の淘汰は見られなかった。ただし、各蔵元の規模は存廃に大きく影響しており、1981年に年間生産量が1000kl以上の大規模企業は、存続率が100%なのに対して、1000kl未満300kl以上の中規模企業は67%、300kl未満100kl以上の小規模企業は44%、100kl以下の零細企業は33%であり、昭和期において年間生産量が多かった企業であるほど、現在まで存続していることが判明した。

次に存続の要因を明らかとするため、生産量・主に生産する清酒のタイプ・出荷先等に関する聞き取り調査をおこなった。その結果、1000kl以上

生産する大規模企業では、清酒産地として埼玉県の全国的なブランド力が弱いことから、県内の工場では一般酒（経済酒）を工業的に大量生産・出荷し、特定名称酒などの付加価値率の高い製品は、新潟や兵庫などの銘醸地で生産・出荷することで、経営を維持している蔵元が多い。一方、年間生産量1000kl未満の中小零細規模企業の多くは、県内の清酒消費量の多さから県内・地元向けに清酒を生産・出荷することによって存続をしているものの、ナショナルブランドとの競合や酒類消費の低下の影響を受け、その生産規模は平成期において縮小している。しかしながら、この状況下においても一部の蔵元は、大手居酒屋チェーン等とのPB契約・清酒醸造技術を活かした多品目酒類の生産・特定名称酒の特化によるブランドの獲得等の経営対応により、生産規模の維持・拡大に成功していることが判明した。

213 日本における籐細工について一松江藩籐細工を中心の一

藤原 茂（松江工業高専・非）

I はじめに

日本における籐細工は幕末から明治時代初期にかけてスタートし、各時代・各地域により様々である。また、原料をすべて海外にたよっている。この籐細工の実態について述べたい。

II 籐の生産と流通

籐はヤシ科のつる性の植物で、主産地は東南アジア（インドネシア・マレーシア・フィリピン）である。現地で一次加工を行い、日本へ輸出してきたが、原料産出国の輸出規制が厳しくなってきた。

III 日本における籐細工の歴史と分布

産業としての籐細工のスタートは幕末から明治初期である。開港にともない、技術が中国よりもたらされたことで普及した。

籐細工の製作地は日本各地に点在している。主産地をあげると、東京・関西・中京地区である。東京地区は、挽籐と製作部門が分業体制をとっていることや、椅子など大きな家具製作を特徴としている。関西地区も、敷物を含め大きな家具の製作を特徴としている。中京地区は乳母車の製作を特徴としている。その他、各地に点在する工房は、それぞれ独自の作品を製作している。

IV 松江藩籐細工について

松江藩籐細工は、幕末に下級武士の内職という形で始まった。小物を中心に製作するという伝統を持つ。明治時代末から昭和時代初期にかけては大きな家具なども製作したが、第二次世界大戦後、また小物の製作にもどった。明治初期には6軒あった工房も、現在1軒のみである。

現在ただ1軒残っている長崎家の当主は5代目である。独特の技法「花結び」などが伝えられてきた。第二次世界大戦後、民芸運動への道を模索したこともあったが、現在は籠・花入れなどの家庭で使用される小物の製作を行っている。

V おわりに

現在、輸出規制と後継者難ということで急速に工房は減少してきている。また、文献資料は残されていない状況であり、継続した調査が急がれる。

214 「復興」と熊本—西南戦争後における士族授産事業を中心として—

本本浩一（広島女学院大）

本報告では、拙稿（歴史地理学53(1), 2011）で提示した「[自由]な行為主体（アクター）の社会的かつ「地域的」実践が都市空間に刻印され、その結果として近代の都市は近代都市変化するための準備が整う」仮説を検討するため、西南戦争前後の熊本を事例として、①「復興」とは何であったのか、②鎮台（工兵方面）による用地取得、③士族授産と土地利用の変化を検討した。特に、③については、士族授産事業に伴う士族の動向をもう一つのアクターとして把握した。

その結果、以下の点が明らかになった。まず、熊本区・熊本市における人口・世帯数の推移を検討し、明治9（1876）年から明治20年代半ばにかけて大きな変動がなかったという通説に対して、少なくとも明治13（1880）年頃まで復興事業に関わる多彩な人口が流入し、社会的構成が変化した。

鎮台による軍用地の取得は明治6（1873）年に始まった。明治8（1875）年にいったん完了した山崎練兵場については、明治8年以降拡張のための交渉が行われていた。市街戦直後の明治10（1877）年4月、警備線が設定され、その範囲が結果的に練兵場拡張の範囲となり、拡張事業は明治11（1878）年2月に完了した。

西南戦争時に主戦場となった内坪井地区を取り上げ、被害の状況を他の地域と比較検討した。明治10年1月と明治15（1882）年10月の家数を比較した場合、92.5%が被災し、明治15年時点で新築（回復）したものが46.3%であった。城下町の時代に町家であった新町、細工町、西鍛形町などがいずれも100%以上の回復率を示しているのとは対照的である。

熊本における士族授産事業は、明治8年6月の緑川製糸会社の設立に始まる。明治11年に設立された力食社では、西南戦争によって被災した士族に対して、「早晩糊口ノ道ヲ失ヒ…一社ヲ結び難民ニ力食営業ノ道ヲ図リ…」（力食社一卷・明治十年至同廿一年）とする認識を示し、被災地（宅地）において、「廃無ノ宅地ニ桑茶ヲ培植シ其他便益ノ事業ハ端ヲ追テ着手スベシ」（同上）と、復興事業と士族授産事業の連携を謳っている。蚕業会社は、明治14（1881）年4月に設立され、力食社に続き「年賦ヲ以テ桑園ヲ貸与スルモノトス」（手取本町産業会社一卷・明治十三、四年）ることを目的とした。結果として、政府及び旧藩主細川護久からの貸与金によって約66町の土地を購入した。その多くは、明治20年代半ば以降、個人（その多くは士族）へと所有権移転を行うことになり、結果として士族の土地を保存することになった。

熊本の場合、西南戦争による市街戦を契機として、城下町から近代都市に変化するための条件が整った。その条件とは、諸々の相対的に「自由」なアクターの実践によって結果的に整っていったものであった。

215 瀬戸内臨海平野の地形環境変遷と遺跡立地に関する予察的検討

宮本真二（岡山理科大）

I はじめに

瀬戸内海の沿岸の「臨海」沖積平野・沖積層に関する研究は、1960年代頃から進展し、ボーリング・コア試料による堆積環境の復原・編年研究により、地形発達史研究が進展してきた（藤原、1986）。また、沖積平野に埋没している遺跡の地形環境研究や、ジオ・アーケオロジー、環境考古学的な学際研究（宮本、2013a）が、高橋（1989・1990・1994・1995・2003）らによって実施され、

その結果、微地形変化「モデル」が提示された。しかし、縄文海進以降の地形発達史的研究では、堆積層に関しても最上部層として一括されてきたように、短期間に発生・変化してきた微地形、それに対応してきた人間活動の実態を理解する上では、いまだ未解明な部分が多い。したがって、本研究では既存の研究群を整理し、今後の検討課題を提示した。

Ⅱ 瀬戸内海沿岸平野の地形発達史と遺跡立地研究

佐藤(1996)の整理によれば、瀬戸内海沿岸においては、広島平野、岡山平野の沖積層の堆積構造が明らかにされ、いくつかの沖積平野の遺跡の立地と海水準の関係について検討されてきた。また、高橋(1995)は、「地形環境分析」を行った結果から、瀬戸内海沿岸の平野形成過程について縄文海進以降のステージを認め、各類型と歴史時代における土地開発との関係を考察した。このうち近畿・山陰に多く分布するラグーン・タイプについては、歴史時代における地形環境についての研究が進められている(高橋, 1989, 1994)。

いっぽう、中国地方の瀬戸内海沿岸に分布するデルタ・タイプは、最近(完新世段丘Ⅱ面の段丘化以降)になって形成され、歴史時代の地形環境の変遷に関する研究はあまり実施されていないと指摘されている。

Ⅲ 内陸平野と臨海平野との対比と研究課題

海水準変動の影響を受けずに形成された内陸の沖積平野と、海水準変動の影響を受けて形成された臨海平野の地形発達イベントを宮本(2013)や佐藤(1996)と要約し、以下の課題を得た。

瀬戸内臨海平野の地形環境変化と遺跡立地の特色として、①沖積平野の陸化が遅く、それに対応した土地開発である。イベント発生の要因は、解明されていないが、②地形環境変化の時期が内陸の沖積平野の発達史と同時代性があることは、指摘できた。このことは、藤原(1996)も指摘しているように、「流入河川の影響の少ない小規模な低地と海水準変動との整合性」を整理する必要がある。また、学際性研究を重視する立場(宮本, 2013, 宮本・野中, 2014)からは、瀬戸内臨海平野において、局所的な考古学的な研究は進展しているが、「地形環境研究」は進展していない事実、そして環境考古学や、ジオ・アーケオロジー

という学際研究が進展していない研究史も整理した。

216 朝鮮王朝後期における国土人文地理観と自然地理観の融合

轟 博志(立命館アジア太平洋大)

本研究は、韓国における共有財産としての国土地理アイデンティティの源流を探る調査の一環として、その中興期と位置付けられる朝鮮王朝中期に焦点をあて、当時の地理学者(実学者)が国土地理思想をどのように形成させていったかを、主として史料分析を介して考察することを目的とした。その結果抽出された見解は以下のように要約される。

一つ目は、自然地理学的アイデンティティと人文地理学的アイデンティティが同じ重みをもって並立し、両者が同等視されると同時に同一視されていることである。二つ目は、前者の代表として山とそれに連なる分水界(山経)が、後者の代表として道路網が認識の中心となっていることだ。

朝鮮王朝前期の地理誌、例えば『世宗実録地理志』や『東国輿地勝覽』等は、詳細な地誌データが網羅されているものの、「どこに何があるか」の羅列に終始しており、地理的事象相互間の関係性や体系などを理解することはできない編纂方式であった。そこを克服したのは申景濬で、彼は断片的な地理的情報を統合し、国土スケールに体系化した。彼が最初に著したのは『山水考』と『道路考』(ともに1770)で、前者(山経と水経)を自然地理の代表、後者を人文地理の代表と見做した。続いて王命により編纂された『東国文献備考』の地理編(輿地考)を担当した彼は、山水と道路を中心として、国土地理を説明する手法を取った。また全国的な地理体系を「経」、地域ごとの地誌を「緯」と捉え、両者を同一のヒエラルキーのなかに編入して扱った。山に関しては「山経」と「山緯」、川に関しては「水経」と「水緯」といった具合である。「緯」は従来の地理誌にもあった内容であり、申景濬のオリジナルはその上に立って「経」、つまり地理知識を国土単位に体系化したことにある。山は三角山(首都の鎮山)または白頭山(民族の靈山)を中心とした体系へ、川は海を収斂点とした十二河川の体系へ、道路は首都を始発点とした九大路へと、それぞれの

特性に合わせた「経」を形成した。

その後、一般への普及と携帯化を目的として表形式の書写本や木版本が普及したが、これらも中身は『山経表』と『道里表』が通常セットになっており、合わせて一巻の本であるか、上下(乾坤)分冊になっていた。ここでは水経が省かれているが、これは自然地理と人文地理双方の分量を統一するための措置と考えられ、ここにも両者を同等

視する思想の一端が見て取れる。同様の理由で、比較的分量が少ない道路には「緯」の部分も追加した。

一方の水経は自然地理(境界)と人文地理(交通路)双方の役割を兼務しており、山と道の仲介的役割も果たしている。山経・水経・道経の「三経体制」が、朝鮮王朝後期の国土地理アイデンティティの根幹であるといえよう。